



難
船

水
野
葉
舟

特 別
A14
8169



^14
8169

<2006-169>

425
595

難
船

水
野
葉
舟

サニダ



九月に入った。恐ろしい嵐の来る期節に入
った。

町の中、ちらほら見越けた避暑客は一人も
居なく、目付に何となく無智を表情のある、
色の真里を他の人——この漢人村の漢夫はか
り。

こゝは常陸の或る海岸で、濱街道に沿った
小さな宿がある。海は太平洋に面した荒海
だ。岸は砂の丘か二里にも三里にも渡つて
広がる。そこに沿つて存在する松林、長く

樹も又狂おの舞しを續いて居る。漢人町を出
て、其舞の葉梅の悲痛を叫ぶ声、を授けて、

イニシカハウに
細い波木を入す

沖の方から

② 難

ほづれた處に立つて見ると、その松並木が
を~~き~~て狂ひまがらふ。狂ひ寄る波の音に
尼合せ悲しめるやうだ。

九月の三日になつて、嵐が来た。その三四
日前あたりから里い怪しやう雲が、空を
ものしく動いて居たが、三日の夕方に、
~~あ~~サシ強い風が吹いて来た。と思ふと嵐に
なつてしまつた。とれか
磯の方では浪に^{あは}られて、浪は高くあつた

と見えて、その夜は槍の音と浪の響き目
目一層耳響ひかこるやうな血く直之来る。
夜に入つておらは、ちうこの小さい漢村は悔
の底に~~あ~~るまゝおしよると思はれる程、
狂ひ廻はつた。
とくに雨さへ交つて~~あ~~来たので、次の
日は、夜明けたが、朝と夕とも思はれな
い程であつた。
その日の午^ごに、風が^あづか
りとなつてしまつた。雨も小さくなつた。

狂ひ寄る波

おる也、家の前は俄に賑かになつて、村の人
連のかやく言つて通る。

停車場(この漢人町より一才十二三町也山際

に寄つた處にあつた)の方は何の溢あふれ、水

の家やの床こにつかつた、と言ふ事ことの侍しへられ

た。
まあ、しかしこれだけ處は静しずまつたのだ。

二

それより三日して、この間に海は

浪の常つまつて溜たまつて高く打ち寄せて來る。

世よにいでて見ると、あの一い夜よの中ちに、どい位ど海

が荒あれたらうと思おもはれる程ほど、諸しよんちにかかに

は平常じやうじやうは湿しりありある程ほど、乾かいて居ゐた處ところよよ、浪

の洗あつた跡あとのあつて、居ゐる木き片かただとの

浪なみの潮うしほに晒あされた芥かひの山やま藻もだとかの林はやし子こ打う

ち上う作つくら洗あひかへ居ゐる。

と、絶たえが吹ふいて來きる。その浪なみが吹ふかれて立た

つて居ゐる也、自然じぜんに如何いかにも暮くれた、親おやしみ

かみ

④

の枝のまゝ、暮々しい婆をし居るやうな感じ
 がある。——そのに居る、もう秋の冷をした
 居た。
 もう夏もいよいよ日の光を烈しく照らしては
 居るが、底が冷えて来たやうが、天地の何と
 なく、~~あ~~めやかにあつて来た。
 その晩は——さうが、九月の六日の晩だ
 ったかと思ふが、その日は、私は廿三日
~~来~~来た。家族の一人が宿の二階に居ました。来
 た時は家族の一人が旅者と、外に三四人も加つ
 て居たので、賑であつたが、その連は前の
 日に東京に暮たしてしまつて、一人残つて居
 たので、寂しい。寂しい、海岸で、二日
 ぶり三日ぶり一人で暮して見たいと思ふ心
 持もあつたので。
 私ほ——もう夕方だつた。そのめやが、
 己びしい、冷えた身が肌にはぬさむのを
 何の身に沁むと身へられるやうで、
 母室の海の見える方の窓に、
 肌を叩いて、
 花と

十ノ廿 松屋製

として居ました。ものを身へることもなし、見
 ることもなしと言った。心持で居た。直碓の方で
 は、壊れかゝるやうな痕の音があるのだが、そ
 も聞かぬ。身は馴れ馴れと、たゞ遠い處で、重
 いものお掛かっている。だが、その音がひどく底
 悲しく、細く人の心を誘つて行くやうでした。
 私に灰色に見える、渡碓に行く方の道を、見
 たら、たのたのた。人通りの多い、砂地に
 ついた道が、草の葉が裏に返つたやう
 何だか、つと寂しい色をして居るのを見て、う
 っかり、連れあつてしまつた。寂しい、
 持たぬとある、寂しい心持が、たぬの、居ると、
 その道を一人の僕夫が、バラバラと馳けて、
 た。と、償いて又一人行く。僕も、それを通
 追ひ掛けるやうに又一人……見ると、道の曲り
 角の處に、この町の女房が二人ばかり立つて
 人の馳けて行つた方を見て居る。
 何となく事ありけぬ様子である。馳けて行
 く人は、この町を正面に見る處の、瀧に突

⑥
難
櫻

さ出た丘の上に行くらしい。私は三階から降
 りて見た。宿の主人に
 何だらここに居るう？、今瀧の方に大也
 人の馳けで行ったか？と聞く、主人は
 何もあささうに
 難船おさうで……その沖です、今この先の
 好らさう言つて来よしたか。と言ふ。
 難船……さうか、ちや僕も行つて見やう。
 何柔らた？
 この沖たさうで……
 主人と言ふのは四十五六の中表だか。――首
 のだ、顔の小さ、丈の高、男で、何時も
 西手をだらりとさせて、田小さ古目を栗舞の
 やうにきよつるせ、おから、もの言、時には
 田に保、穀の寄る。何時もはらして、一
 寸調子の脱けた處のある男だが、今はより
 己け張の急く思はれる。
 私は黙つて家を出た。急いで廣の方に行か
 うとあると、前を前した二人の男の前へして
 馳け行く。私をついにこれに
 道
 馳け出し

十ノ廿 松屋敷

た。皆の行く處はこの出鼻の丘で、そこ
 悔の廣く見える。に
 私と息せき切つて丘に上つた。丘の中の一
 段高くなつて居る處に、人が三四人集つても
 つて居た。私とそこに上つて行つた。
 上の上には立つて見ると、眼下に廣い悔の
 海は赤く濁つて居た。車とつた
 丘の上には三人の男が居た。一人は漢夫。
 一人は停車場の方から来たと思はれる。若
 い丸を着た男、一人は犬の姿の靴を引らし
 の人と思はれる。深くの靴を穿いて、
 尻を踏折つて居た。その男が三人とも
 西南に當り悔中幸者の方を見つて居る。
 私の上つて行く、深き靴を穿いて居
 た男は持つて居た。眼鏡と、黙つて私に
 た。その時、
 △△の沖で、と志候夫が言つた。△
 私に眼鏡を眼に當てやるとして、一歩外して

8.

其顔を見た。丈夫の足の下に、目上に驚いて、
 唇を赤くして、結んで、沖の方のを見詰めた。
 千代もあから、右の身で遙か沖をさして見
 せた。あると、
 和子はあんなに若い男が身を欠し
 曲げて、その指の先を、若くも足で踏む。
 「おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 中の船を、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 岸におり、碇の返らぬでやらあ、たんだ、たんだ、
 のぬら流さぬ、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 して言ふ。おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 さうからう。おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 った。このおまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 う、あ、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 男の、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 何あてあ、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 私眼鏡を、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 の指の方を、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの
 丁おね、おまじい人か、三人見ると。艇船が、沖でこの

寄せて

これ、母の顔の色が違つて見えるよ。あ

こゝろを覚^{こころ}じ。と言ふ。私は眼^{まなこ}と鏡^{かがみ}を

目^めを^また。悔^{くわい}は、涙^{なみだ}に^な近い^{ちか}い^い處^{ところ}は、返^{かへ}しの^し痕^{あと}で^で滑^なつて^つ居^ゐる。

その先^{まへ}は深^{ふか}碧^{あざ}……途^{みち}か^か沖^{おき}破^{やぶ}を^を卷^まき上^あり^あす

の方^{かた}は、夕^{ゆふ}々^々を受け^うけて、毎^{まい}日^{にち}一^{いつ}帯^{おび}つて^つ居^ゐつ

て居^ゐる。お大^{おほ}の言^{こと}の^{こと}は、その深^{ふか}碧^{あざ}の^の尖^{とが}と、

思^{おも}つた^つおと^との境^{さかい}目^めの事^{こと}である。

私の眼^{まなこ}鏡^{かがみ}の^の定^{さだ}ま^まり^りお^おに^に居^ゐると、^お靴^{くつ}の^の男^{おとこ}は^は俯^{うつむ}か

ら、東^{あづま}を^をま^ません^{せん}か^かね。

見^みえ^えま^ません^{せん}か^かね。海^{うみ}の^の色^{いろ}の^の暮^{くれ}つ^つた^た處^{ところ}ね、あ

すこ^{すこ}に^に里^{さと}く^く長^{なが}い^いもの^のを^を見^みえ^えま^ませ^せう^う?、……と、

辨^わり^り指^さす^すに^に力^{ちから}を^を入^いれ^れて、海^{うみ}を^をその^{その}方^{かた}向^{むか}を^を指^さす。

人^{ひと}は^は左^{ひだり}し^しか^かに^に三^{さん}人^{にん}だ。と^とい^いふ。

この^{この}時^{とき}に^にお^お大^{おほ}の^の言^{こと}を^を切^きつ^つた。

人^{ひと}と^とい^いふ。

私^{わたし}は^は聞^きいた。お^お大^{おほ}の^の早^{はや}い^いお^おと^とと^と言^いふ。

わ^わら^らい、敬^{けい}之^の風^{かぜ}を^を言^いつ^つた。身^み体^{たい}は^は疲^{つか}れ

り^りお^おは^は三^{さん}人^{にん}だ。

10
下

第三章だけ
十一号みある、
ルビつき

6号

10
上

10

おのれ見えるが、外の奴ら、協さかたしら。

大徳、何人乗り位の船田がい？

さうさ、世人位は乗^かせよ。

堅る船より^んは……

と、言ふ處に、下るら四五人の男の上つて来

た。……

何おた。何おた。と叫ぶ。

……

……

常に岸浪頭が、白く泡立つて、浪も次第に漲

くよつて来た。……

……

三

……

……

……

……

……

……

又一人の言ふ。

何しと云ふのだ。

一回の午を扱へて、何事か待ち構へて居る

やうだ。と、^{其處へ}村の方をら夫の低い、

半島^の白の志^をやつて来た。母^は三十

向^がりの處に^来て足^にて、一寸相^三を

したと思ふと、^裸裸体の中をら

「そら、器械を除けた！と言ふと、その連

中の俄に氣負ひ立つて働^き初める。喚^き出し

やおて、船は破れおらあると、浅瀬に引

き出された。其男と一所に、^船船も声を合

せ、船を押し居る。氣^早や^可男^は居る。

船^中に^おび^込んで居る。一人二人と

私の心も引^き入^られるやうで、何と云

く氣^負つて来る。何^も濡^れて、^腰腰^は切^つ

て、^覆覆^つた船の底に取り浪^に付いて居る、^七七

う半死半生の摸^大の^若若^々……若、^心心を躍^ら

せ、^懐懐んだ、その種^の強^其強^の姿^の胸^に懐^か。

何のたごならぬ事を思ふやうに思^はれ、今

己のら自分の眼前に表^はれ来るやうで、

其男と一所に、
女も声を合せて
船を押し出す。

見^え居
ると、

平の圃まで来る。そして其圃に固は次介に急

くま。處へ耳をさし、又ワツと調子付いた声の聞

えた。覗ると残った一艘の船に、一杯の人の

乗った。浪の中は残り切った川口を出て来

る。夕方の海は霞の濡れたやうな色に見

せる。男達の裸体を

風が疾くよつて来た。悔の波は次介の膝に

つて、益々浪の荒れをびしく冷めたくかゝる。

波の二の船がやがて波次介に沖の方に出で行

った。

岸では——丘の尖に突き出た岩の、

上からは大きい松が差しかつて居る處に、

四五人の人が集まつて沖を見て居る。川口の

對は長い、何にもない秋の邱で、今、黄香の

色が暗く、伊波んで、葉涼とした景色に見え

めいて行くやうな、荒涼とした景色だ。

遠くに見える松並木はぼつと霞んでかたつと

次介は静まつて居る。浪がけだ。

恐ろしい音をさせて、岸を渡る荒れ垣はつて
 居る。舟の葉は其の舟の痕の跡は若様
 私中懐には居るのほ白井は舟の四半は舟岩
 角の處に立つて悔を見月を居たお一振り
 返ると、そこに四五人の人が集まつて居たの
 で、その方にそろそろ近づいた。
 その人は浪のお味の極るぬ息に、
 近づくと、私は近づいてその中の一人……白い
 髪のおへたお夫の面を見せると、指さして
 「お多おらう。助かつて来やうかね。」と固く
 と、其處に居る人達が一時に振り返つて私を
 見た。
 さようさな。三人も見えたと云ひおあおら、
 そおは目連かこ来おかけせう。と言ふ。声は
 さびびりたいたい。おへに焼けた四小さい顔に
 白い長い髪が生へて居る。藁をよ、田舎の人
 らしい目付……おらと、
 ほんとおね……
 何
 おらの顔のだから、おへは、おへは、おへは、
 と、私の傍に居た四十位の女の……停車場

ここに序
の日は、

前の宿^{カクヤ}と料理^{カクヤ}とを兼ねた家の主婦^{カクヤ}と言
 ろ女^{カクヤ}のキバキバした声^{カクヤ}が言^{カクヤ}ふ。
 「△△あたりの船^{カクヤ}だらうま^{カクヤ}。と、志^{カクヤ}夫^{カクヤ}が言^{カクヤ}へ
 る……」
 「死^{カクヤ}んで来る^{カクヤ}だらうか^{カクヤ}。誰^{カクヤ}かか言^{カクヤ}ふ。
 半^{カクヤ}死^{カクヤ}の姿^{カクヤ}で来る^{カクヤ}んだらう。志^{カクヤ}夫^{カクヤ}が言^{カクヤ}へる。
 死^{カクヤ}んで居^{カクヤ}るよ^{カクヤ}い^{カクヤ}が」
 誰^{カクヤ}か喋^{カクヤ}き合^{カクヤ}つて居^{カクヤ}る。海^{カクヤ}はち^{カクヤ}う一^{カクヤ}秋^{カクヤ}毎^{カクヤ}に暗^{カクヤ}さ
 お増^{カクヤ}して来る^{カクヤ}。し^{カクヤ}つかりと見^{カクヤ}送^{カクヤ}め^{カクヤ}て居^{カクヤ}た因^{カクヤ}に
 ち、ち^{カクヤ}うほ^{カクヤ}つとし^{カクヤ}た灰^{カクヤ}色^{カクヤ}の雷^{カクヤ}の中^{カクヤ}に、儼^{カクヤ}に星^{カクヤ}
 い^{カクヤ}点^{カクヤ}お、ま^{カクヤ}あ、そ^{カクヤ}れ^{カクヤ}で^{カクヤ}あ^{カクヤ}る^{カクヤ}と^{カクヤ}思^{カクヤ}は^{カクヤ}お^{カクヤ}る^{カクヤ}位^{カクヤ}。
 初^{カクヤ}め^{カクヤ}は^{カクヤ}不^{カクヤ}意^{カクヤ}な^{カクヤ}出^{カクヤ}来^{カクヤ}事^{カクヤ}で^{カクヤ}の^{カクヤ}驚^{カクヤ}き^{カクヤ}と、何^{カクヤ}と當^{カクヤ}
 ち^{カクヤ}急^{カクヤ}い^{カクヤ}お^{カクヤ}恐^{カクヤ}ろ^{カクヤ}し^{カクヤ}さ^{カクヤ}と^{カクヤ}で、集^{カクヤ}ま^{カクヤ}つ^{カクヤ}て^{カクヤ}来^{カクヤ}て^{カクヤ}居^{カクヤ}た人^{カクヤ}
 達^{カクヤ}だ^{カクヤ}お、決^{カクヤ}り^{カクヤ}は^{カクヤ}こ^{カクヤ}の^{カクヤ}嶺^{カクヤ}の^{カクヤ}岬^{カクヤ}の^{カクヤ}處^{カクヤ}に^{カクヤ}居^{カクヤ}る^{カクヤ}中^{カクヤ}
 て、骨^{カクヤ}か^{カクヤ}あ^{カクヤ}や^{カクヤ}う^{カクヤ}な^{カクヤ}痕^{カクヤ}の^{カクヤ}音^{カクヤ}が^{カクヤ}強^{カクヤ}い^{カクヤ}海^{カクヤ}の^{カクヤ}色^{カクヤ}と
 を^{カクヤ}見^{カクヤ}て^{カクヤ}居^{カクヤ}ると、次^{カクヤ}分^{カクヤ}に^{カクヤ}心^{カクヤ}を^{カクヤ}沈^{カクヤ}ん^{カクヤ}で^{カクヤ}来^{カクヤ}ると
 思^{カクヤ}え^{カクヤ}て、皆^{カクヤ}黙^{カクヤ}つ^{カクヤ}て^{カクヤ}し^{カクヤ}お^{カクヤ}つ^{カクヤ}た。と^{カクヤ}して、何^{カクヤ}事^{カクヤ}か
 非^{カクヤ}常^{カクヤ}な^{カクヤ}出^{カクヤ}来^{カクヤ}事^{カクヤ}が^{カクヤ}あ^{カクヤ}る^{カクヤ}や^{カクヤ}ら^{カクヤ}な^{カクヤ}か^{カクヤ}つ^{カクヤ}と^{カクヤ}思^{カクヤ}つ^{カクヤ}て
 居^{カクヤ}る^{カクヤ}や^{カクヤ}ら^{カクヤ}だ^{カクヤ}。そ^{カクヤ}の^{カクヤ}中^{カクヤ}に^{カクヤ}あ^{カクヤ}つ^{カクヤ}お^{カクヤ}り^{カクヤ}暗^{カクヤ}く^{カクヤ}ま^{カクヤ}つ^{カクヤ}て^{カクヤ}し

三四十人の男の声が一所に集つて響いて来る。
こゝに居た四五人は一時に駆け出した。

船の音と、歌の声と一所に集つた。船は川の中

へつゝ来た。岸のおに力が奪つたやうには
控炮を打つた人が、~~日~~ ~~母~~ ~~妻~~ ~~女~~ ~~所~~ ~~か~~ ~~り~~ ~~の~~ ~~手~~ ~~を~~ ~~打~~ ~~つ~~ ~~た~~

と打つて、人の奪おつて居る。船の向きがく
つと換つた。懐い乗りに乗り止れる

如何したと云ふと、山岸の三峰に三人の若
と揃へて呼んだ。 ~~す~~ ~~ま~~ ~~の~~ ~~船~~ ~~が~~ ~~か~~ ~~ら~~ ~~は~~ ~~や~~ ~~は~~ ~~り~~ ~~の~~ ~~船~~

船はさう遠くまゝたのには、船ははや降り歌
唱の音に居る。岸の人の言ふ事と取調子を揃へて

会合ぬやうに歌つて居る。
如何したと云つて、母一人は氣早に水

に下つて船に近づいた。
如何もあるかある、何處に船があるよ

と曰ふ船の音に叫んだ。
口をひいて、口をひいて、又拍子を揃へて歌

ひ出した。
如何したんだ。岸に立つて居る

控帳を
打った

の裸体男がその中から腹^{はら}けて鯉^{こい}魚^{いそ}を是^{こゝ}に上^あつて来る。
 此^{こゝ}に居^ゐる人達は皆^{みな}あぐまの
 間^まひをける。裸体は
 っつ、今夜は極^たまりもよらぬ一^{いっ}つと言^いつて、
 行き過ぎてしまふ。

~~一^{いっ}つの心打^{うち}ちから見て居^ゐた。あるとそまへ、
 さんと言^いふ裸体^{はだか}の人の、
 誰^{たれ}かだ。一体^{いったい}こんな事^{こと}を言^いつたのは！と、
 群^{ぐん}真^ま汀^{てい}の方^{かた}で、船^{ふね}のら出^で出^でしやかつて来^き
 た一人^{ひとり}が叫^{こゝろ}んだ。
 誰^{たれ}かだ！又一^{また}一人^{ひとり}が叫^{こゝろ}んだ。
 の中^{なか}から、そいつと裸体^{はだか}の一人^{ひとり}が出^でた。~~

群^{ぐん}真^ま汀^{てい}の島^{しま}水の^{みづ}の^{なみ}ち^ちし^し居^ゐる^まで

何と云く願せよつて居る。私は此のらえぬを

見ると居ると、そこへ、人込みの中をら、えろつ

とこの裸体の一人が出て来た。私と周囲の中

で顔を見せると、近づいて

あ、この所へ来たか？と、白い歯を出

して笑ふ。

「あ、多したんだい？」

「松の樹がサ……十二三間もあらうつて言ひ

松の樹の懐に入居ました。」

「へエ？」

舟の方には立って居たの……もろ私を

おびこむばかりよして、胸に縄を挂け付け

居りました。船に立って居た男が、

ちつと近づいて、足に指をさから、何だ

？……可笑しいと、と云ひ、お目しこま。

船を寄せて思ると、大きな松の樹はありま

せん。お目で、そこを口で声をおげ、

「えぬと分るとつて来た。申すや、録か

かしぬねへおこ言ひぬ。お目しこま

お目しこま……と、お目しこま

お目しこま……と、お目しこま

行平

若つて一す笑ひながら
 松の村ごとしと云ふ
 人二人と引き上げ行く
 た。何の力も加わらず
 家に入る事と、土間に
 立つて居た。主人は
 「殿前か？」と一語
 話しおぼつかせて
 殿前らしいね？と云ふ。

おやぢ！ 恒位飲ませね
 く言つた。主人の言ふ
 「おら、一人ぢや分らね
 是駄当か？」と言ふと、
 った。目の中恐ろしい、
 鹿の皮に包まれた厚い
 牛には程よく打つて居
 程かい
 その夜は、村中何となく
 ちやぢ人の往来も聞え
 耳立つて聞えた。

行平

止

だが、社を更けたと
 浪の音ばかりにま
 小まくつて、切つと
 悔の上には心を
 悔ふ心には悔ふ
 心と繋つて来た。

(五はり)

人の心は流れたのだから。村は寂しげな
 場所

法

二十五年二月
 又 二十五年分



